
千夜一夜物語

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千夜一夜物語

【著者名】

Z9535R

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】

魔女との契約でこの国の王となつた若き青年。その先に待ち受けていたものとは?

1・契約（前書き）

こんなもんです、海斗の生活は。

1・契約

その若き男は魔女との約束通りこの国の王となつた。

全ての財産を国民から奪い取り高台に大きな塔のある城を作つた。国¹の全てを見渡せるように・・・・・

だが、その途端、若き国王は眠れなくなつてしまつた。

異常に気付いた彼は城内の医師を呼び眠りに就けるような薬を処方させた。

「マイスリー」「レボトミン」「A B 1」「フルニートセバム」「

ユーパン」「ソラナックス」「ルーラン」。

どれも利かなかつた。

一日の政務を終えた王は寝室へと戻り、シルクのベッドに横たわると天井をうつすらと見つめた。

「また、寝れないのか・・・・・・」

溜息をつき、目を閉じる。

そこに。

人の気配を室内に感じた若き王は傍らの剣をとり、ベッドから素早く身を起こした。

「ほほほ・・・・・・」

暗闇に聞き覚えのある声がした。

「お前は・・・・・・！」

いつの間にか西側の扉が開かれており、そこには黒いドレスを纏つた一人の女性が立つていた。

契約を交わした魔女だつた。

王は魔女に詰め寄つた。

「私はこの国の国王となつた。貴方の力を借りて。しかしどうして眠れなくなつたんだ？」

「それは国王としての義務だよ。」

紅の唇を形よく歪め、彼女は告げた。「お前はこの国²の王になつ

普通だつたら王位には
た。莫大な遺産を残した前国王の愛人の子。
つけない。それを私が王にしてあげた。
」

• • • • • • •

「だからその契約の代償はある。お前は一生眠らざあの」と、城下町を望む事が出来る金色の縁を施した窓を指示し、「あの窓から人々がどう暮らしているか、困つてゐる事はないか、見守らなければならない。24時間。」

「そんな契約知らないぞ！」

「少しうま」口のつる。
若き王は立腹した様子で返答した。

魔女は冷静だった。「これからは毎晩、お前が見た事を私に語るが良い。真の国民の生活を知つてこそ真の魔王。既、お前を魔王として認めるだらう。そうしたら契約は解除だ。」

—
•
•
•
•
•
•
•
—
—

暮の三には無言か。力

「考へるかい。しかし、むちにしてもどんな薬を処方しても
私の契約が完璧にまつ当するまで、お前は眠りを失う。」

一国民の救いに手を差し伸べてやる

「國民の救いに手を差し伸べてやる」とたゞどんな些細な事でもお前の心に留めておくことだ。昼は政務。夜は國民の姿を見守る事。ただそれだけだ。」

一五四

紅いビロードのカーテンが大きくなびいた時、魔女の姿はもう何処にもなかつた。

• • • •

若き国王は沈黙した。

夜を知らない生活。

国王は、金色の縁が施された窓に向かつて歩いた。

眼下には無数の光。

「この豊かな国で貧しい者などいるのだろうか・・・・」
その時。

一人の少女が子猫を抱えて何かを売つていた。

「・・・・」

他にも大勢の子どもたちが、何かを売つている。

若き王は、今夜はこれしか見届ける事が出来なかつた。
何故、そんな小さな子が・・・・
疑問だけが残つた。

1・契約（後書き）

毎日更新出来たらいいですね～（へろへろ）

第一夜（前書き）

暗い夜の路上で蠅燭を売る少女と出逢った王。それは・・・・・

第一夜

魔女との契約により「眠り」を失い王となつた彼は、深夜、こいつと城の裏口から出ると、あの金色の縁を施した窓から望めた少女の元に向かつた。

外は真冬。黒のコートを来ている王にも夜風が厳しかつた。

「こんなところで何をしてるんだい？」

よく周りを見渡すとあちらこちらで、「蠟燭はいりませんか？」といつ少女の声が聞こえて来る。

「蠟燭を売つてゐるんです。」

6歳位である少女性は赤い薄いフード付きのコートを羽織り凍える声で答えた。

「どうして。」

王は凍える少女を哀れに感じ、自分のコートを脱ぐと少女に被せた。

今夜は雪が降りそうだ。

「ありがと。」

少女はこいつと笑つて礼を述べた。

勿論、彼がこの国の王だといつ事には気付かず。

「蠟燭を売ると何かお金になるのかい？」

王は尋ねた。

「はい。」

少女はこいつと頷き、「私の両親は病氣で亡くなつて今は祖母と住んでます。でも、祖母は日も見えなくなつて日々の食糧にも困っています。だから、知り合いの蠟燭屋さんに頼んで蠟燭を売つて、そのお金で食べ物や暖かいスープを祖母と共に食べています。」「どれくらい売れるんだい？」

「1日10本位。」

「いくらになるの？」

「300ウォン位かしら。」

大体この国の生活の最低限だった。

「だから」

少女は続けた。「あっちの子も私の友達。一緒に蠅燭を売るようになつてから友達が増えました。」

にこつ、と少女はあどけない笑みを浮かべた。

「そう・・・・・・・・」

「貴方は蠅燭はいりませんか？今夜は冷え込むから、そして満月でもないから灯りは必要でしょ？」

そう問い合わせる少女に、

「そうだね。」

王は肩を竦めた。

城に帰ると大きなシャンデリアが幾つもあり、灯りに不自由はない。

だが。

「眠り」を奪われた王の事を知らない城の者たちは、ある時間になると一斉にシャンデリアの蠅燭を消して廻る。

その暗闇の中で、王はひと夜を毎晩明かしているのだ。

「もう一度聞くけど、いくらかい？」

「300ウォンです。」

「それなら、その君が持つていてる蠅燭を全部私が買おう・・・・・10万ウォンでどうかい？」

「10万ウォン！？」

少女はびっくりとして、「それは高すぎます。」

「でも、そうしたら君と君のおばあさんはパン以外に暖かいステーキ肉を食べられるのだろう？」

「ええ・・・・・・・・」

「蠅燭を当分、こんな寒い中売らなくとも済むのだひつへ

「はい・・・・・・・・」

「じや」

そう言つて、王は胸ポケットの皮細工の財布から10万ウォンを少女の目の前に差し出した。

「・・・・・いいんですか？」

「ああ。」

王は微笑を浮かべた。

ちらちら、と小雪が舞い始めた。

少女の小さな手にそのお金を握らせると、

「復活祭も近い。何か美味しいものを食べるといい。」

「はい！」

少女は喜んで答え、蠅燭の入った籠を王に差し出した。

それから、

「でも、何で見ず知らずの私にこんな大金を・・・・・・・・

「君のその蠅燭が私の夜を救ってくれる。」

王はそれだけ答えた。

城に帰ると王は側近の一人を呼びだした。

「この蠅燭の炎を全て灯してくれ。」

「はい。」

それから一呼吸置いて、「しかし、王。もう、ご就寝しなければ明日の政務に滞りが・・・・・・・・

「いいのだよ。」

王はにっこりと笑つてシルクのベッドの上に腰かけた。

「こうすれば、私は『夜』を忘れられる。」

その視線の向こうには、金色の縁を施した一つの窓。

第一夜（後書き）

突発ですね（滝汗）。

第三夜（前書き）

王は一人の女性と出逢った。彼女もまた「眠り」を忘れた女性だつた。

第三夜

王の部屋のあの金縁の窓からは街の大通りが見渡せる。

彼は今夜もその窓から眼下を眺めていた。すると、一人の紅いドレスの女性の姿が目にとまった。

「そういえば、いつもいるな。」

王は呟いた。女性は通り行く人々に何か声をかけているようだが、皆、彼女の前を素通りしてしまう。

「何だろう。」

今夜は彼女に会おうと王は城を抜け出した。

「何をしてるんだい？ こんな寒い中。」

女性は突然の問いかけに多少驚いたようだった。

「私を買つてくれる人を探しているんです。」

「買つてくれる人？」

「そう。」

「いつも君はここにいるね。」

「はい。」

「でも、ある一定の時間が過ぎると帰つてしまふね。通りゆく人々に声をかけるだけで。」

「それは、誰も私を買つてくれないからです。」

「では、私が君を買おう。」

「はい？」

女性は目を丸くした。

それから、

「私は統合失調症とかいう病気です。それを話した途端、自身を引きます。両親にさえ部屋の中に閉じ込められたままです。」

「薬は飲んでいるのかい？」

「はい。セレネースだけ飲んでます。不安な時や眠れない時。」

「でも、君は少なくとも朝方3：00までここにいる。」

「眠れないからです。昼間の外出は両親に止められています。」

それから女性は少し俯いて、「だから、両親が寝た時間を見計らつてここに来て、体を売つて少しのお金を貯めて両親が起きる前に家に帰るのです。」

「それなら」

王は言った。「私の城に来るといい。

「はい?」

女性は再び目を丸くした。

「私はこの国の王だ。魔女との契約で「眠り」を失つている。だから、君が眠れないのと同じ、私も24時間眠れない。どんなに政務に疲れても、魔女との契約が実行されない限り私は眠りにつけない。」

「まあ、何てこと!!!」

女性は小さな叫び声を浴びた。「貴方がこの国の王様だったなんて。」

「だから、私の城に来るがいい。」

王は微笑した。「眠れない時は私が話し相手になろう。それと、城には医師もいる。君の苦しみを少しでも楽にしてくれるかもしれない。サプリメント療法もある。それに、城には沢山のメイドがいるから友達も出来るかもしねれない。そうしたら、君はもう、この通りに立つ事も無くなるだろう。」

「・・・・・」

女性は驚いて目を丸くしたままだった。

僅かな人々が通りを歩いて行く深夜。

誰も、この一人の会話に耳を傾ける者はいない。

寒さの中、背を丸くして家路に急ぐか、路上で生活費を稼いでいたりする。

「この国中の医師にも声をかけよう。」

王は言った。「少しでも君のように苦しんでいる人たちに十分な

治療を施せるよ。」「

「王様……」「

ぱつり、と女性は声を出した。

「ああ、おいでの城でも君は自由だ。好きな時に好きな場所へ行く事もできる。」「

田を細める女性に、王はそっと右手を差し伸べた。

第三夜（後書き）

まつめつでんなー。

第四夜（前書き）

魔女との契約により眠りを奪われた王。その契約を解除するには24時間国の民の生活を見守り魔女に伝える事だった。

第四夜

その若き國[王]は嫡子ではなかつたが、莫大な財産と共に、そして魔女との契約によりその國[王]となることができた。

眠りを失つてしまつた王、その次の夜は黒のコートを羽織り城からそつと抜け出すと夜の町へと向かつた。この國はまだ貧富の差が激しい。夜に商いをする者も数多い。

王は城から遠く離れた路上の一角で花を売る少女たちと出逢つた。どうやら双子らしい、良く似てゐる。

「やあ。」

王は声をかけた。「もしかして、君たちは双子かい？」

「そうよ。」

金髪の長い髪をシュシュで結わえた2人の少女は声を揃えて何の抵抗もなく素直に答えた。

「お花はいりませんか？」

「私たちが育てたお花なの。」

「どんなのがあるのかい？」

「白ユリにガーベラ。」

「パンジーにかすみ草、薔薇もあるわよ。」

笛で編んだ籠を王の眼前にかざす。

「見事だね - - - そうだね、貰おうか。しかし、どうしてこんな夜中に花を売つていいんかい？」

「夜に商いを始める店もあるから。」

「そうそう。お店にお花をプレゼントとかいひいろと。」

声を揃えて、少女たちは言つ。

「どれくらいのお金になるの？」

王は尋ねた。

「一本5ウォンよ。」

「安いでしょ。みんな私たちの家で育てたものだから、言ってみれば産地直送よ。」

2人は声を合わせて笑った。

自然と王の顔にも笑顔が浮かぶ。

「そうだね。」

王は辺りにいる同じような花売りの少女に視線を投げかけながら、「それじゃ、君たちの家に咲いている花やあそことかで花を売つている少女の花を全部買い取ろう。」

「え？」

「どうして？」

「いい事を思い付いたんだ。」

銀髪の王は楽しそうに思案気に左の親指を噛み、「明日の - - もう今日か。一番にみんなに声をかけてあの」

と、月明かりに照らされる塔がいくつもある城を指差し、「城の正門に集まってくれないか? そこで私は君たちの花を全て買い取ろう。ついでに建築士もみつけてくれ。」

「建築士?」

「大工さん?」

「そう。」

「何で?」

「どうして?」

「それは君たちが来てからのお楽しみ。まず、約束は約束。」

王は右手の小指を差し出した。

少女たちも同じく2人で小指を差し出す。

チャリ・・・・・・・

少女たちのその小指には金貨が沢山入った小さな袋がかけられた。

「これ、約束。」

彼は微笑んだ。「朝にはもつと払うよ。」

「そんなに・・・・・・？」

「こんないつぱい・・・・・・？」

彼女たちは目を丸くした。

静かに裏口から城に戻った王は、そこで魔女と出逢う事になる。
「何をするつもりだい？」

王の寝室の片隅で、黒いドレスを纏つた魔女は冷やかな笑みを浮かべてそう言つた。「お前はお金さえ『えれば真の国王として私が認めるとでも思つているのか？契約が無効になるとでも思つているのかえ？』

「いや。」

王は静かに首を振つた。「君の言つ通りだ。だが」と、魔女を真正面から見つめ、

「夜が明ければ、私は18歳になる。その記念に花をあの子たちからプレゼントしてもらひうのさ。勿論、沢山の花になるだろうから、抱えきれない。だから、今度の誕生日の記念として花が満ちた建物を作らうと思つている。それには建築士や大工もいる。その者たちにもちやんと礼を払う、仕事をした証として。」

「そう。」

魔女は苦笑を浮かべた。「もつ18歳か。」

「ああ。」

王も苦笑して答える。「お前との契約から、私がこの国の王となつてから3年経つ。」

彼の寝室には見事な月明かりが、金色の縁を施した窓から射し込んでくる。

第四夜（後書き）

ほちほちでんなー（本当に突発です）。

第五夜（前書き）

国王は政務の合間をみて、普段見たこともない匂の町中へと出た。

政務を素早く終えた王は、昼間の町中へ出た。夜はどうせ眠れない、夜の民の生活も見ている、では昼間はどうなのだろう。

そう思つたからである。

「出かけて来る。」

「どちらへ、王様。」

使いの者には何も答えず、馬に乗るとこの国の特産物であるレア・メタルの採掘場へ向かった。

世界の40%近くがこの国から輸出されている。

そこで働く大人に、王は、

「これだけ働いて、いくらになるんだい？」

「100000ウォンです。」

「結構な仕事だね。」

「でも、それだけ採るには3日位はかかりますよ。」

「そうか。」

王は軽く頷いた。

それから王は町中へ向かった。

果物屋、野菜売り場、穀物売り場。

皆、国外から来た者へも売れていて、これもこの国のかなりの収入源となっていた。

市場は大勢の人で賑わっていた。

その中で、王はあの双子の少女を見つけた。

「君たち。」

優しく声をかけると、

「あら、王様。」

「王様だわ！」

果物をバケットに入れた2人はにっこりと笑つて答えた。「王様が私たちのお花を買っててくれたから毎日この市場に来れるの。」

「そうかい。」

「近くの大工さんや建築屋さんも来てるのよ。」

「それは良かった。」

銀髪の王は微笑した。

そこへ。

数人の少年が近寄つて來た。

「王様。」

「王様。」

口ぐちにそう言つ。

「なんだい？ 靴磨きの仕事かい？」

「そうです。」

少年たちは口をそろえて言つた。『王様。靴を磨かせて下さい。』

「僕にも！」

どんどんと子供たちが集まり、王を取り巻く小さな円となつた。

「どうしてだい？」

王は不可思議そうに彼らに尋ねた。

すると、少年たちはこう答えた。

『王様に会うと、お金を貰えたり何かいい事があるつて。』

『町中の噂になつてるよ！』

『だから、僕は靴を磨く事しかできないけど王様に何かしてあげたい。』

「・・・・・」

王は目を細めた。

その脳裏に魔女の冷やかな笑みがよぎつた。

第五夜（後書き）

ぼつまつ（滝汗）
なつ、5／14のMOI試験に向けて勉強中です m(—)m

第六夜（前書き）

いつの間にか、眠りを失った王の周りには彼の財産を求める者たちが集まるようになっていた。やがて、それは家臣や親族にも――それも魔女との『契約』を解除するための報いなのか？

「何故だ、魔女！」

紅い月の光が射し込む王の部屋で窓際にひつそりと立つ彼女に、王は声をかけた。「私はお前の言う通り国の民の暮らしを毎晩見に行き、お前に告げた。」

そこで、銀色の切れ長の目を細め、「なのに、いつの間にか民は勿論、家臣や親族にも私の財産を狙う者が出て来た。それが、お前の望みなのか？」

「誤ちは繰り返されるのだよ、ヴェエルデヴォリナ国王。」

黒いレースのドレスを纏つた魔女は紅の形の良い唇を微笑みの形に変え、「お前の母は、前国王の愛人だつた。確かに、前国王は隣国との関係を保つために『準備』された結婚だつた。子ももうけてはいない——城のメイドの一人にすぎないお前の母を愛し、お前をもうけた。それは純粹な愛だつた。」

「・・・・・」

「小さかつたお前には判らなかつたろう。『愛』には色々な形がある。中身のあるもの、ないもの、そして変わらぬ愛、変わる愛。」

「・・・・・」

「お前を授かつた後お前の母は今度はその地位を我が子であるお前に授けたかつた。そこで、城内ではヴェエルデヴォリナ派と隣国から嫁いできた王妃とで派閥争いが生まれ、それは次の王をお前にするかそれとも王妃がその座に就くか内紛が起つた。」

「・・・・・私は知らない。ただ、幼き頃より母から次の国王だという命は受けていた。」

「そう。お前の母の愛はやがて全てを欲する『愛』に変わつていつたのだよ。お前を守ろうとする『愛』も絡んで。」

「・・・・・」

月明かりが——瞬、途絶えた。

濃い灰色の雲がその源だつた。

「では、どうすればいいのだ。」

若き国王 ヴェルデヴォリナは静かに告げた。「また、明日も明後日も……民の暮らしを伝え続けねばいいのか、お前に。だが、そうすればまた、”私の財産”を狙う者が出てくる。」

「初めに言つたであらう、ヴェルデヴォリナ。」

魔女は冷やかな口調で答えた。「お前が真の国王にふさわしいのか、ふさわしくないのか……そのために毎は政務をこなし、夜はこの国の民の生活を知るのだと。」

「その通りだ。」

「では

右手をすつ・・・・・と彼の前に差し出した魔女はこう告げた。

「モンターラの森は知つてゐるか?」

「ああ。入つた者は一度と出れないといつあの樹海だな。」

「そこに行くがいい、今夜。」

「何?」

王は目を見開いた。「あそこから出た者はいないぞ。」

「あの森の中央には森の女神が湖に眠つてゐる。」

2人の視線が中空で絡み合つ。

魔女は少しだけ笑みを浮かべ、

「彼女が持つてゐる剣をこの城まで持ちかえるのだ。そうすれば、女神にもこの国の王と認められた事になる。」

「……」

王は戸惑い、それから、「そうすれば私とお前との『契約』も解除出来るのか?」

「それはまだ先の話よ。」

魔女は高らかに笑つた。「私やその女神がお前を王にしているのではない。お前の母の”『靈”がお前を国王にしているようなもの。」

そこで、一端口を閉じ、やがて、

「だからこそ、お前は眞の国王となるべくあらゆる困難を乗り越えなければいけない。」

「そういう事。」

ヴェルデヴォリナは静かに目を細めた。

「行くか、王よ。」

手元の椅子にあつた黒いコートを素早く取つた彼の姿を見て、その背後に魔女は声をかけた。

「行くよ。」

肩越しに、王は冷たい笑みを浮かべた。

「それで良い。それがお前の亡き母の願いでもある。」

魔女はそう告げた。「聖なる剣『エクスカリバー』を手に入れるが良い。」

月は。

紅の輝きを再び地上に落としていた。

第六夜（後書き）

没没没。。。でんなり。

第七夜「雲隠れ」（前書き）

それはある日の事だった。

第七夜く雲隠れ

『剣を取りに行くがよい。』

魔女がそう言い残した翌日も、ヴェルデボリナ国王は紅のベルベッドの長いカーテンの開かれた隙間から陽光が射す部屋で政務についていた。

「で、あのライラ地方のチタンの件は？」

銀髪の髪を振り、王は隣の者に尋ねた。

「はい、その件ですが - - -」

それが、王の耳に届いた最後の言葉だった。

「ちよつとだけ・・・・・・。」

ふいに。

王は鳩の羽で作られたペンを書類の上に置くと、そのままそのうえに上体を乗せた。

ゆつくりと、昼間近の日射しが降り注ぐ政務室で。

王はゆつくりと頭を伏せた。

雲隠れ。

今日、二番堂でなんとか（をいつ…）とこつ今一番売れてる絵本を立ち読みしてきましたー。内容は森の小屋を動物たちが喰つた寝た挙句（をいつ…）自分たちの家に改築して朝食のお菓子の用意もして寝たら、目が覚めると子供たちが部屋にいつぱい（〇〇）という話でした（確かにこんなの一）。沖縄の離島（をいつ…）に住むオリビー@純子ちゃんはこの絵本を知ってるかな？高校時代の卓球部の同期生。子供好きの絵本好き。なう、4子の母。はー、すげえー やー！いや、これで完結ではありませんので（単に更新しないと「完結処理」されてしまつが故）。

第八夜（前書き）

モンターラの森にいる湖の女神の剣を取りに行けばよいといつ言葉を聞いた国王にふいに、睡魔が訪れる。

第八夜

「ここは・・・・・」

ヴェルデヴォリナは目を開けた。

そこはモンターラの森だつた。

緑が深く周囲を立ち込め、行く手も何処から来たかも判らなかつた。

彼は目を細めた。

「確かに私は・・・・・」

そう、政務の途中に突如、何年かぶりの睡魔に見舞われたはず。

「そうだ。政務をこなさなければ。」

しかし。

魔女が言つたこの湖の女神の剣を持ちかえるといつ台詞も気に入る。

第一、何故、今、自分がここにいるかも判らなかつた。

「・・・・・」

王は、湖に行く事を決意した。

感を頼りに、足下の朝の滴も無くなつた緑を踏みながら前へと進んだ。

一体どれくらい進んだのだろう。

突然。

視界が開けた。

そこは、碧が澄んだ湖だつた。

「ここに女神がいるのか？」

王は呟いた。

すると、それに気付いたかのよう、湖の中心が突如左右に割れ、滴が周囲に飛び散つた。

「・・・・・」

「来ましたね、王様。」

綺麗な、澄んだ声が何処からか聞こえた。

正面を見ると、湖の中から銀色の鞘を両手に携えた一人の金髪の女性が現れた。

衣服は白いレースのベールに包まれている。

「貴方がこの森の主か？」

王は尋ねた。

「そうです。」

彼女はにっこりと笑った。

何処かで見覚えのある笑顔だった。

「私は魔女との契約でこの国の王になつた者だ。その代りにこの国の民の日常を知り、魔女に伝える・・・そして、いつか『契約』が成立すれば私は魔女に奪われた眠りを取り戻す事が出来る。」

「そう。ラグラリータの事ね。」

女神は微笑した。「あの人は悪い魔女ではないわ。『白の魔女』よ。決して悪いにはしない。」

「私はその言いつけで、貴方の剣を受け取りに来た。」

「それはいいですけど」

彼女はそこで一呼吸置き、眉間に皺を寄せた。「この剣は眞の王でなければ鞘から抜けない。貴方にはそれが出来るのかしら？」

「さて。」

王は苦笑した。「それは私にも判りかねる。何か条件があるのか

ね？」

「そうね。」

女神は暫し、思案した挙句、「何の欲も持たない者だけが抜けるのかしら？」

「・・・・・・。」

王は戸惑つた。

自分は母の策略もあつてこの国の財産を目当てに王となつた。

それを『欲が無い』と言えるのだろうか？

「決心が付いたら」

女神は湖の水面を滑り、彼のいる陸地へと近づいて来た。

「この剣を受け取りなさい。あとは貴方次第。今まで、この剣を抜いた者は彼のアーサー王しかいない。私は彼が自分の命の果てを知った時、この剣を預かつたまで。」

「・・・・・」

「後は貴方次第。」

森に。

モンターラの森に再び風だけの静寂が訪れた。

第八夜（後書き）

ぼちぼち。 。 。 。

第九夜（前書き）

モンターラの森の湖の主から王となるのにふさわしいか、その剣を抜けるかどうか問われた、王。それは・・・・・。

第九夜

王は目を開けた。

昼間近の陽光が眩しい。

「大丈夫ですか、王。」

側近が机から顔を上げた彼に問いかけた。

「いや、何でもない。」

「少し眠られていたようですね。」

もう一人の側近が言つた。「先週から眠剤に入れているベゲタミンやセロクエルが利き始めたのでは?」

「・・・・・。」

その台詞に王は無言だった。

自分は確かに夢を見た。

モンターラの森の湖の女神の夢を・・・・・・

「・・・・・・。」

王はそのまま席を立ち、窓際へと向かつた。

昼の賑わいを見せるその城下は夜のそれとはまったく違つていた。あの、花売りの少女。

今はこの城のメイドとなつた王と同じく眠りを知らない女性。

そんな彼女たちとは違う、街の風景。

「光があるから闇がある。」

王はぽつり、と呟いた。「光はその闇を隠すかのように光輝いている。」

「どうかされたのですか? 王。」

「私はこの国の光と闇を見て來た。」

振り返り、王は側近たちに答えた。「夜は魔女の契約通りこの国の本当の姿を見て、昼は太陽の光に隠された人々の生活を政務をこなしながら見て來た。」

「国王 - - -」

側近は口を噤んだ。

あまりにも眩しい陽光が王の背後から忍び込んで来たからだ。

「私はモンターラの森の湖の主が持つ剣を抜く事は出来ないだろう。」

ヴォルテヴォリナ国王は断言した。「何故なら私のこの王の座は私の母によつて『作られた』ものだからだ。」

「薬の加減がおかしいのですか？国王。」

薬師が目を細めた。

「違うのだよ。」

王は静かに首を振つた。「私は魔女との契約で眠りを奪われた。昼は昼の政務をこなしてこの国の民の暮らしを良いものにし、夜は闇の中で仕事をする貧しい人々の姿を見て来た。」

王は初めて、側近にそのことを告げた。

「もう3年にもなる。」

「魔女とは・・・・・・」

側近はその言葉に弋がわついた。「魔女に呪いをかけられたのですか？」

「呪いではない、『契約』だ。」

王はそう答へ、「いつかこの国の民全ての者が・・・夜に仕事をする貧しい者も昼に汗をかきながらレア・アースを採掘する者も、貿易で利益を得ている者も、果物やシルクを売つて生活する全ての民が皆平等に暮らせるようになると。」

そして、続ける。「だが、私は今気付いたのだ。私は仮の国王に過ぎない。眞の国王はこの国の何処かにいる。その者ならモンターラの森の主が持つ、何の欲も無い者だけが抜く事が出来る剣を受け取る事が出来るのだろう。」

「それは前国王の嫡子、ヴィアラ殿下の事ですか？」

「ですが、ヴィアラ様は貴方の母君が隣国の王としてこの国から出された方ですよ。」

「ヴィアラの国もこの国よりは山奥にあるが、彼はちゃんと政務

をこなしている。」

「ヴェルデヴォリナ様。」

側近の一人が目を細めた。「一度、魔女払いの儀式を受けてみては？」

「これは夢ではない、現実なのだよ、みんな。」

王は苦笑して答えた。「確かに、ヴィアラは母の命に素直に従い、隣国に拠を移した。ヴィアラとてその時は何か考えがあつたに違いない。モンターラの湖の剣を抜けるのは彼かもしない。」

「ど、言う事は？」

「・・・・・」

王は何も答えず目を伏せた。

自分の今の地位が欲と言う母が我が子可愛さ故に据えたものだから、王は自分はあの剣を抜くことは出来ないと思ったのだ。

「国王。」

年配の側近が口を開いた。「貴方様は一度もヴィアラ殿下と会つた事はない。ヴィアラ殿下は前国王の計らいで、遠い・・・そう、モンターラの湖の向こうに幼き時より拠を移されていた。」

「知ってる。」

「一度、お会いになつては如何ですか？隣国とは表面上友好を保つていますが・・・確かに、この国と貿易からなる規模の国ではあります。この国の事に勿論関心を持たれています。」

「そう・・・・・・・」

王は左の親指の爪をかんで、少し思案しているようであった。それから、

「隣国となれば尚更友好を保たなければならない。」

「では、モンターラの森にある剣をぬけるのは、ヴィアラ殿下？」

側近がどよめいた。

在位してから3年間、政務を司つてきた側近たちに、今、王は『眞実』を告げたのだ。

もし、ヴィアラの方が剣を抜く事が出来たなら、この国の眞の国

王は・・・・・

静寂だけが執務室に訪れた。

第九夜（後書き）

ぼちぼちと・・・・・（＝＝）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9535r/>

千夜一夜物語

2011年9月18日11時56分発行